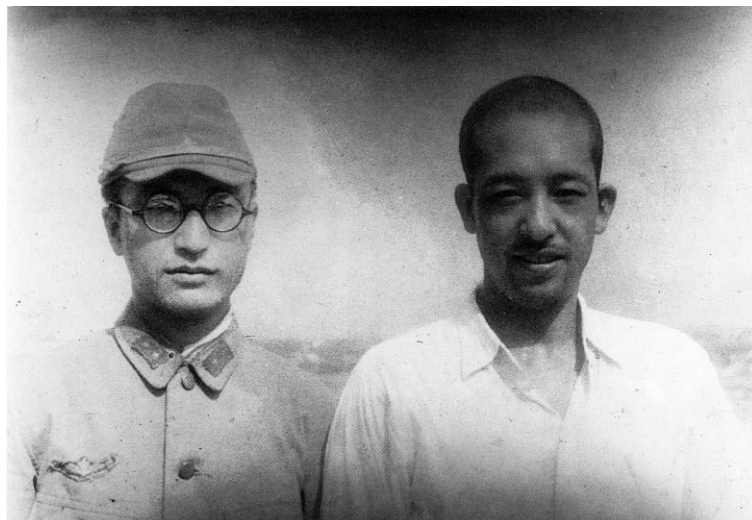


(4)敗戦

ポツダム宣言をめぐっては陸軍を中心に、天皇の統治権を否定するものと解釈し、「国体」の变革につながるものとして受諾に反対する意見が存在していた。最終的には昭和天皇が、ポツダム宣言を受諾しても「国



体」は護持されると判断して降伏を決定したが、陸軍には徹底抗戦を求める将校も多く、東京ではクーデタ未遂事件が発生している。丸山が配属されていた広島船舶司令部も同様の状況であり、丸山は、暴発を抑えるための説得工作を上官の酒井四郎中尉と計画した（画像：丸山真男と酒井四郎中尉〈『丸山真男戦中備忘録』〉）。

しかし、実際にはほとんど説得するまでもなく、司令部内の強硬論は沈静化してしまった。それは配給された物資を自分の家に運ぶのに忙しくなってしまったからであった。一方、兵士たちは復員できることを喜ぶ者が多かった。全体として言えば「国体」は、人々の内面からのコミットメントに支えられていたものではなかったのである。